

ポルトガル語の呼応に関する基礎的考察

坂 東 照 啓

0. はじめに

ポルトガル語において文中における2つの語、あるいは2つ以上の語が相互に対応する形式を示すという現象が観察される。この現象は一般に呼応という用語で知られているものである。呼応は多くの言語で広く見られる現象であり、ポルトガル語にのみ見られるといったような、ポルトガル語に固有の現象ではない。しかし、その呼応の現れ方は必ずしも全ての言語で共通するものではない。どのような範疇で、またどのような要素の間で呼応が生じるのかということは言語によって異なっている。

これまで、ポルトガル語の呼応について具体的な型を列挙するという記述は見られるが、その呼応と呼ばれる現象に関わる基本的な問題についての十分な説明はなされていないようである。しかし、われわれは、ポルトガル語において呼応が実際にどのように現れるかということを具体的に示すこととともに、呼応の仕組み、呼応の一般的特徴を探ることも意義があるのではないかと考える。そこで、本稿ではポルトガル語における呼応の具体例の提示から、さらに呼応の本質的な問題についても今後1つの見解を示すことを目標として記述を進めたい。

1. 呼応の定義について

ポルトガル語の文法用語辞典である Câmara Jr.(1978:77) では、呼応(concordância)の項において次のように述べられている。

(1) Câmara Jr.(1978:77)

Princípio, vigente em muitas línguas, segundo o qual, num sintagma, o vocábulo determinante se adapta a certas categorias gramaticais do determinado

「(呼応は)多くの言語で見られる法則であり、この法則に従い、ある統合体において限定語が被限定語のある一定の文法範疇に対応する」

(1)は呼応に関する定義として標準的と言えるようである。他にも例えば、Luft (1986:21), Bechara (1987:295)で呼応についての記述はなされて

いるが、(1)とその表現方法は異なるものの内容的に特に注目されるような相違は見受けられない。

(2) Luft (1986:21)

Princípio segundo o qual certos termos (dependentes, determinantes) se adaptam, na forma, às categorias gramaticais de outros (principais, determinados).

「(呼応は)ある要素(従要素、限定要素)が形態において他の要素(主要素、被限定要素)の文法範疇に対応する法則」

(3) Bechara (1987:295)

Chama-se *concordância* ao fenômeno gramatical que consiste em o vocábulo determinante se adaptar ao gênero, número ou pessoa do vocábulo determinado.

「限定語が被限定語の性、数、人称に対応することで成り立つ文法現象を呼応という」

呼応については内容的に(1)あるいは(2), (3)と類似する記述が多くの文法書で見受けられ、このような記述が一般的なようである。ただ、Ali (1965:118)における呼応の定義には注目すべきではないかと考えられる部分がある。

(4) Ali (1965:118)

Concordância é o processo sintático segundo o qual certas palavras flexionáveis tomam as formas de gênero, número ou pessoa correspondente à palavra ou palavras a que no discurso se referem.

「呼応は、ある屈折する語が談話において関係する1つあるいは2つ以上の語に対応した性、数、人称の形態をとるという統語的作用である」

(4)が(1), (2), (3)など他の記述と異なるところは、*no discurso*と述べている点である。ここで*no discurso*と明記しているということは、Aliが呼応関係において単に文だけではなく、コンテキストをも意識しているのではないかと考えられる。

2. 呼応が生じる要素と呼応に関わる範疇

ポルトガル語の場合、呼応は、原則的には名詞(*substantivo*)とその修飾・限定語の間、主語とその述部要素の間に生じる。この呼応が生じる文法範疇は性(*gênero*)、数(*número*)、人称(*pessoa*)である。つまり、名詞とその修飾・限定語の間、主語とその述部要素の間において性、数、人称といった文法範疇に関して形態上の一致が生じるのである。

2. 1. 名詞とその修飾・限定語の間

ポルトガル語の名詞は男性か女性かのいずれに分類され、単数、複数の変化がある。つまり、ポルトガル語の名詞は性によって分類され、数によって変化する。この性と数に関して名詞とそれを修飾する(あるいは限定する)要素の

間に呼応が起こる。

- (5) a. o país (その) 国
- b. bom músico 上手な演奏者
- c. este homem こちらの男性
- d. um livro 1冊の本

(5a-5d) における名詞 *país*, *tempo*, *homem*, *livro* は男性単数名詞であり、これを修飾する (5a) の冠詞 *o*、(5b) の形容詞 *bom*、(5c) の指示詞 *este*、(5d) の数詞 *um* はこの性と数に対応した形式である。ここで名詞が性数に関して異なれば、それを修飾する冠詞、形容詞、指示詞、数詞もそれに対応する異なる形式をとることになる。名詞が男性単数であるにもかかわらず、これを修飾する冠詞、形容詞、指示詞、数詞が女性や複数の形式で現れるということはない。つまり、名詞が男性単数ではなく、男性複数、女性単数、女性複数であれば、それを修飾する要素もそれぞれに一致した形態で現れる。

- (6) a. os países
- b. bons músicos
- c. estes homens
- d. dois livros
- (7) a. a cidade (その) 都市
- b. boa obra よい作品
- c. esta mulher こちらの女性
- d. uma casa 1軒の家
- (8) a. as cidades
- b. boas obras
- c. estas mulheres
- d. duas casas

(6a-6d) における名詞は (5a-5d) におけるそれぞれの名詞の複数形、すなわち男性複数名詞であり、(7a-7d) における名詞は女性単数、そして (8a-8d) における名詞は (7a-7d) におけるそれぞれの名詞の複数形、すなわち女性複数名詞である。このように名詞が男性複数、女性単数、女性複数になると、それを修飾する要素である冠詞、形容詞、指示詞、数詞もそれぞれの性数に対応した形態をとる。名詞とそれを修飾する要素の間におけるこうした性数の対応は規範的規則であり、両者の間で性数に関して形態的に不一致があれば非文法的とみなされる。

2. 2. 主語と述部要素の間

ポルトガル語の述語の動詞は、人称と数に関してその主語である名詞あるいは代名詞に対応する形式を示す（なお、本稿で用いる略記号については後に一括して掲げる）。

(9) a. Eu vou ao cinema.

I go-IdPS-1sg to+the cinema

「私は映画を見に行く」

b. Você/Ele/Ela vai ao cinema.

You(-sg)/he/she go-IdPS-3sg

c. Nós vamos ao cinema.

We go-IdPS-1pl

d. Vocês/Eles/Elas vão ao cinema.

You(-pl)/they-m/they-f go-IdPS-3pl

(9a-9d) における vou, vai, vamos, vão はいずれも動詞 ir の直説法現在時制の形式である。法・時制が共通であるにも関わらずこうした異なる形式が現れている理由は、主語の人称と数が異なるためである。つまり、動詞は主語の人称と数に応じた形式を示すわけである。

こうした主語に対する呼応は、述部要素の動詞だけでなく、述語の静詞(nome)にも生じる。

(10) a. O aluno está aborrecido.

the pupil-m be bored-m-sg

「その生徒は退屈している」

b. Os alunos estão aborrecidos.

pupils-m bored-m-pl

c. A aluna está aborrecida.

pupil-f bored-f-sg

d. As alunas estão aborrecidas.

pupils-f bored-f-pl

(11) a. Ele é professor.

he be teacher-m

「彼は先生です」

b. Eles são professores.

they-m teachers-m

c. Ela é professora.

she teacher-f

d. Elas são professoras.

they-f teachers-f

(10a-10d) における述語の形容詞は、主語の名詞の性・数に応じた形態を示している。同様に、(11a-11d) における述語の名詞は、主語の名詞の性・数に応じた形態を示している。つまり、述語の形容詞、名詞は、性・数に関して主語の名詞に呼応するのである。

以上のように、述語の動詞は人称と数に関して、述語の静詞は性と数に関してその主語に対応した形式を示す。すなわち、述部要素はその主語に応じた形式を示すのである。

3. 呼応の分類

呼応は一般に2つの種類に分けられている。それは静詞の呼応

(*concordância nominal*) と動詞の呼応 (*concordância verbal*) である。この呼応の分類の基準は、形式が対応する要素の語彙的範疇によるものとみなされるが、同時に呼応に関わる文法範疇の違いも両者には認められる。つまり、静詞の呼応では性と数が、動詞の呼応では人称と数がそれぞれ一致する文法範疇である。すなわち、性、数、人称といった文法範疇のうち、数はいずれの呼応においても関わる文法範疇であり、性が静詞の呼応においてのみ、そして人称が動詞の呼応においてのみ関わる文法範疇となっている。

3. 1. 静詞の呼応

静詞の呼応は、静詞が名詞に対し性と数に関して形式の対応を示すという呼応である。この呼応における静詞は、修飾・限定語の機能を担う場合と述語の機能を担う場合がある。

- (12) A sua casa era sossegada.
 the-f-sg his-f-sg house-f be quiet-f-sg
 「彼の家は静かだった」

(12) における定冠詞 *a*、所有詞 *sua*、形容詞 *sossegada* はいずれも女性単数形であり、名詞 *casa* の性・数に一致しているものである。この形式の一致は静詞の呼応であるが、*a*, *sua* と *sossegada* とでは文法的機能が異なっている。つまり、*a*, *sua* が *casa* に対する修飾・限定語であるのに対し、*sossegada* は *casa* に対する述語である。

このように静詞の呼応は2つの型に下位分類される。すなわち、静詞が名詞の修飾・限定語として機能する修飾・限定静詞の呼応と、静詞が名詞の述語として機能する述語静詞の呼応である。

3. 2. 動詞の呼応

動詞の呼応は、動詞が名詞（あるいは代名詞）に対し人称と数に関して形式の対応を示すという呼応である。

- (13) Os professores fazem a pesquisa.
 the-m-pl teacher-m do-IdPS-3pl
 「先生たちは調査をする」

(13) における動詞 *fazem* は3人称複数形であるが、この人称と数は名詞 *professores* の人称と数に一致しているものである。*professores* は述語動詞 *fazem* の主語名詞であり、この主語名詞の人称と数に対応した形態を述語動詞が示しているのである。ここで主語が *eu* 「私」であれば動詞も1人称単数形の *faço*、同様に主語が *tu* 「君」であれば2人称単数形の *fazes*、主語名詞が *professor* であれば3人称単数形の *faz*、主語が *nós* 「私たち」であれば1人称複数形の *fazemos*、主語が *vós* 「汝ら」であれば2人称複数形の *fazeis* がそれぞれ対応する形式として現れることになる。

このように動詞の呼応において動詞と呼応する名詞はその主語名詞であり、目的語名詞とは呼応しない。(13)における動詞 **fazem** もその目的語名詞である **pesquisa** と対応した形式を示しているわけではない。人称に関しては両者で一致があるようにも見えるが、動詞が3人称であるのはあくまでもその主語が3人称であるためである。(13)において主語が **nós** であれば動詞もそれに応じた形式 **fazemos** となり、この場合、目的語名詞 **pesquisa** とは数、人称とも対応しないことが明らかである。

4. 呼応の規則とその違反

これまでに述べた呼応の規則は文法的で明快であると言える。しかし、実際の呼応には単純に文法的な規則で説明できない場合もある。形態に基づく文法的な呼応の規則が破られるということもしばしば起こるのである。

4. 1. 近接要素との呼応

主部に等位接続詞 **e** でつながれた 2 つ（あるいはそれ以上）の 3 人称の主語名詞（または主語代名詞）が存在する場合、その述部動詞は 3 人称複数で対応する。

(14) Mariângela e Maria Isabel levaram dois
and take-IdPP-3pl
meses para produzir o livro.

「マリアンジェラとマリア・イザベルはその本を作るのに2カ月かかった」

(14) における主部は **e** でつながれた2つの主語名詞 **Mariângela** と **Maria Isabel** で構成されており、この主部に対し、述部動詞は3人称複数形の **levaram** で対応している。これが等位接続詞 **e** でつながれた2つ以上の3人称主語名詞で構成される複合主部に対する述部動詞の基本的な呼応の型である。しかし、主部が述部動詞に後続する場合には、主部と述部動詞の間でこうした一致がなされないこともある。

(15) Regressou Fernando e a sua
return-IdPP-3sg and the-f-sg his-f-sg
esposa.
wife-f

「フェルナンドと彼の妻は帰った」

(15)の主部には主語名詞として **Fernando** と **esposa** が存在するが、この主部に対する述部動詞は3人称単数形の **regressou** である。ここでの述部動詞は、**regressou** に換えて3人称複数形の **regressaram** であることも可能であり、この形式の方が文法的な呼応の規則には従っていると言える。それにもかかわらず(15)におけるような例外的な呼応も認められるのである。

そうすると、こうした呼応を可能にする条件として、まず、e でつながれた

2つ以上の3人称主語名詞で構成される複合主部が述部動詞に後続している場合ということが考えられる。しかし、(16b)は認められない。

- (16) a. Chegaram os meninos, a
arrive-IdPP-3pl the-m-pl boys-m the-f-sg
avó e o pai.
grandmother-f and the-m-sg father-m
「子供たちと祖母と父が着いた」

- b. *Chegou os meninos, a avó e o pai.
arrive-IdPP-3sg

(16a), (16b)では主部が3つの3人称主語名詞で構成されており、述部動詞に後続している。しかし、述部動詞が3人称単数形となっている(16b)は生じえないのである。この(16b)が認められないことから、eでつながれた2つ以上の3人称主語名詞で構成される複合主部が述部動詞に単に後続しているということだけでは、例外的な呼応が生じる条件になっていないと言える。

それでは、この例外的な呼応にはどのような条件がさらに関係しているのかということになるが、主部に3人称の単数形だけではなく複数形の主語名詞も存在する(16b)が起こらないということからもう1つの加えるべき条件が考えられる。それは、eでつながれた2つ以上の3人称主語名詞がすべて単数であるという条件である。すなわち、例外的な呼応が認められるのは、eでつながれた2つ以上の3人称単数主語名詞で構成される複合主部が述部動詞に後続する場合であるという仮説が考えられる。この仮説によって、(15)は起こりうるが(16b)は起こりえないとすることができる。しかし、この仮説もまた修正されねばならない。なぜなら、(17)が認められるからである。

- (17) Desapareceu o explorador e todos
disappear-IdPP-3sg the-m-sg explorer-m and all-m-pl
os seus companheiros.
the-m-pl his-m-pl companions-m
「その調査者と彼の全ての仲間が消えた」

(17)では主部が3人称単数の主語名詞と3人称複数の主語名詞によって構成されており、これが述部動詞に後続しているにもかかわらず、述部動詞は3人称単数で現れることが認められるのである。従って、eでつながれた2つ以上の3人称単数主語名詞で構成される複合主部が述部動詞に後続する場合に例外的な呼応が認められるというわけでもないのである。

(17)において例外的な呼応が生じていることから、今度は、eでつながれた2つ以上の3人称主語名詞で構成される複合主部が述部に後続し、その述部動詞に最も近い位置にある主語名詞が単数形の場合に、例外的な呼応が起こりうるという規則が考えられる。そしてこの規則によって、(17)における呼応

が起こりうるだけでなく、(15)における呼応が起こりえて、(16b)の呼応が起こりえないということも説明される。つまり、(16b)の呼応が起こりえないのは、e でつながれた2つ以上の3人称主語名詞で構成される複合主部が述部に後続していても、その述部動詞に最も近い位置にある主語名詞が複数形だからである。

このように近接した語に影響を受けてこれと一致し、文法的な呼応の規則が破られるという現象は牽引による一致 (*concordância por atração* または *concordância atrativa*) と呼ばれている。牽引は主語名詞と動詞の間だけでなく、名詞と静詞の間にも起こりうる。

- (18) Contratamos uma artesã e um
 contract-IdPP-1pl a-f-sg artisan-f-sg and a-m-sg
 artesão habilidoso.
 artisan-m-sg handy-m-sg

「私たちは器用な1人の女性職人そして(器用な)1人の男性職人と契約した」

(18)における形容詞 *habilidoso* は男性単数形であるが、*artesão* とともに *artesã* に対する修飾語として解釈されうる。文法的な呼応の規則としては、男性名詞を含む e でつながれた2つ以上の名詞に対する修飾語として機能する形容詞は、男性複数形で対応するはずである。しかしながら、この(18)では、*habilidoso* は直前の男性単数名詞に影響され、これと性・数が一致した結果、文法的な呼応の規則が破られている。

こうした近い位置にある要素との一致である牽引は、文法範疇に関して隣接要素に影響を受けて同じ特徴を示すようになるということであるから、一種の文法レベルにおける同化現象と言える。

4. 2. 意味に基づく一致

(19)における主語名詞と述部動詞は数において文法的な一致が守られていない。

- (19) A maioria das crianças
 the-f-sg majority-f of+the-f-pl children-f
 sobreviverão.
 survive-IdFS-3pl

「子供たちの大多数は生き残るだろう」

この(19)において、主語名詞は *maioria* であるから、その述語の動詞は文法的には3人称単数形で対応するはずである。つまり、述語の動詞は文法的な呼応の規則としては *sobreviverão* ではなく、*sobreviverá* という形式が正しいはずなのである。しかし、実際にはこの3人称単数形 *sobreviverá* であっても、3人称複数形の *sobreviverão* であっても認められる。この後者の場合は、述語動詞が主語名詞である *maioria* の形態ではなく、その意味に

一致しているのである。つまり、(19)における主語名詞 *maioria* は形態的に単数であっても、「大多数」といった複数の個体を意味するので、この複数の意味に対し述語動詞も複数で一致しているということである。

こうした意味に基づく一致 (*silepse*) は、(19)で観察される数だけではなく、人称、性に関しても起こりうる。

- (20) *Muitos de nós tivemos medo.*
many-m of we have-IdPP-1pl fear-m
「われわれのうちの多くが恐怖を抱いた」

- (21) *Vossa Excelência parece extremamente cansado.*
your-f excellency-f seem-IdPS-3sg extremely
tired-m-sg
「貴下は大変お疲れのようです」

(20)においては、主語名詞が *muitos* であるからその述語の動詞は文法的には3人称複数形で対応すると考えられる。つまり、この(20)における述語動詞は、文法的な呼応の規則からは *tivemos* ではなく、*tiveram* が正しいということになる。しかし、実際には述語動詞が1人称複数形の *tivemos* であっても認められる。この(20)の場合、主語名詞と述語動詞の間に形態的な一致はないものの、意味的な一致がなされているのである。つまり、この *tivemos* は、人称(・数)に関して、主語名詞 *muitos* の形態ではなく、その表わす意味に対して一致した形式なのである。

(21)では、主部が2人称単数の待遇表現 *Vossa Excelência* で、主語名詞は女性単数 *Excelência* であるが、その述語の形容詞は *cansado* といった男性単数形である。この場合、述語の形容詞は、文法的には主語名詞の性数に一致した *cansada* という形式で必ず対応するはずである。しかし、実際には *Vossa Excelência* の指示対象が男性であれば、*cansada* ではなく *cansado* という形式が対応する。言い換えると、*Vossa Excelência* が指示する対象の性によって述語形容詞の性が決まるということである。そうすると、これは性に関して形態ではなく意味に一致しているということであり、(21)の場合、述語形容詞が男性であることから、*Vossa Excelência* の指示対象が男性であることがわかる。

上で分析したように、意味による一致は、性、数、人称といった文法範疇に関する形態が意味とずれている場合に生じる。形態上の特性と意味上の特性が合致しないときに、その形態より意味が重視された呼応なのである。

5. 呼応と依存関係

これまで呼応の具体的な型を観察したが、その現象の本質に関わる問題についてはなお議論が必要であろう。その問題とは、そもそも呼応関係が生じる要

素にはどのような特徴があり、他の要素に対し呼応を引き起こす要素（すなわち、呼応関係で核となる要素）は、どのような特徴を有しているのかといったことである。

まず、呼応関係にある要素を観察すると、それらの要素は依存関係にあるということが言える。文法的な規則に従う一致、そして牽引の場合は統語的な依存関係が認められ、意味による一致の場合は意味的な依存関係が認められる。すなわち、統語的、意味的に依存関係にあることは、呼応が生じる必要な条件になっているのである。

こうした呼応関係にある要素は、文法範疇について形態は一致するが、対等の関係にあるわけではない。一方の要素が他方に対して形態を決定する。つまり、呼応は形態を決める主要素と決められる従要素によって成立している関係なのである。ただし、この呼応関係にある決定要素と被決定要素は、依存関係における主要素と修飾要素と必ずしも対応するものではない。確かに、静詞が名詞の修飾語である場合には、性・数を決定する方向が、依存関係の主要素である名詞から従要素である静詞へという方向と一致する。しかし、動詞が主語の人称・数の呼応をする場合、依存関係の方向とは逆である。つまり、主語が動詞の人称・数を決定しているということで、依存関係における従要素である主語から主要素である動詞に向かって呼応がなされているのである。

6. おわりに

呼応には文法的な一致だけではなく、意味による一致がある。文法的な一致が基本的で、意味による一致については例外的とみなされやすいが、言語の目的である意味の伝達という面から考えると、決して不自然な現象ではないと考えられる。呼応関係にある要素は依存関係にあるが、このことから、呼応の意義には、依存関係にあることを示すことがあるのではないかと考えられる。依存関係が示されるということは、意味解釈を助け、意味を明確化することにつながるので、呼応は意味の伝達に寄与する1つの仕掛けであると考えられる。

【略記号】

IdPS	直説法現在	1	1 人称	sg	単数
IdPI	直説法未完了過去	3	3 人称	pl	複数
IdPP	直説法完全過去	m	男性		
IdFS	直説法（現在）未来	f	女性		

【参考文献】

- Ali, M. Said. (1965): *Gramática Elementar da Língua Portuguesa*. Melhoramentos. São Paulo.
- Bechara, Evanildo. (1987): *Moderna Gramática Portuguesa*. Nacional, São Paulo.
- Câmara Jr., Joaquim Mattoso. (1978): *Dicionário de Linguística e Gramática*. Vozes, Petrópolis.
- Luft, Celso Pedro. (1986): *Moderna Gramática Brasileira*. Globo, Rio de Janeiro.